
essais ころみ 2018年7月

2018年7月4日（水） 雨時々曇り

今年は梅雨入りが早かった。先週は夏本番のお天気だった。近畿でも6月中に梅雨明け宣言？と思ったけど、そうはいかず、今週は不安定な空模様が続く。

天気が不安手なら人もまたそうなるのか、月曜の朝、人通りの多い地下街で突然折り畳み傘を出してさし、ひと降りして、銀行のATMボックスへ入っていった女性を見た。

斜め後ろを歩いていた女性の頬に傘の先が軽くあたった。わたしからはすぐ目の前のこ出来事。何をこんな地下街で傘をさすのかと思った瞬間に回りの人を蹴散らすかのように傘を回した。わっ！と声が出た。

「大丈夫でしたか、本当にびっくりしましたね」と側を通り過ぎる時に傘のあたった女性にむかって声をかけた。あまり突然のことで呆然としていた。過日の新幹線の事件といい、街では周囲に注意を向けなければ。

- 本を読むこと ④ - 若い時代に古い時代を読む

若い時には同時代のものを読むよりも、過去のものを読むのがいいのではないかと思う。時代は変わっても人間そのものは変わらない。そういう人間が営む社会。生きていく上で普遍的な何かを見てとることができるはず。

個人的には「堀田善衛」からそういうことをたくさん教えられたと思う。それらのすべては身体化していて、一つ一つ記憶してはいない。でも一つだけある。ある随筆に書いていたことと同じ経験、感慨をもった一件。

もう30才になっていた頃、友人と一泊二日で宮島へ牡蠣を食べに行った。まずはやはり市内の平和記念資料館へ行くことにした。二人とも初めてだった。途中で友人はもう見られないと言いだすほどだった。

状況しだいで人間がどう変わり、他の人間をどれほど悲惨な目に合わせられる生きものか。資料館を出てから二人とも口数が少なくなった。そこからすぐ宮島へ移動し、少し観光して旅館に入った。

夕食の時間、仲居さんが食事を運んでくれる。こういう場合のよくあるやりとり、「どちらからですか？」から始まり、いつ来たのか、どこを観光したのかと問われ、答えて、和やかな雰囲気になる。

その会話の中で、資料館へ行った話をして、二人が受けた印象を話した時、「ああ、あれは広島市のことですから…、こちらはあまり関係がありませんので…」。

さりげなく返されたが、もうそれ以上原爆の話はいいですよと言われた気がした。「堀田善衛」がある随筆で書いていた場面そのままだった。一緒にしないでという暗黙の拒否。

あまり立ち入ってはいけなとすぐに思った。わかった風なことを言ってもだめ。別の話に切り替えて、よくあるやりとりに戻り、食事をたのしみ、旅を終えた。

この時のことを記録はしていないが、ずっと記録している。人間の善と悪、愛と憎、実と虚…。陽と陰をかねそなえて、複雑極まりない人間、自分もまた他者も。だからいとおしいということもある。

2018年7月9日（月）南海電車 梅・美木多駅前

泉北アントレプロジェクトの起業ゼミが堺市南区役所であり、最寄駅に早めに着いて、空を見上げれば、まるで夏の終わりのような雲の様子。前の週、いつまで降るのかと思ったほど降った雨。季節がはやく進んでいるのか…。



2018年7月11日（水） 晴れ時々曇り

9日に近畿は梅雨が明けた。先週後半の連日の雨は異常だった。いつまで降るのかと不安な気持ちになった。西日本各地で記録的な豪雨となり、甚大な被害となった。全容はまだ不明。梅雨明けした青空には夏の終わりのような雲がみえる。まだ7月中旬だけど…。

- 本を読むこと ⑤ - 『人間のしるし』

日経は文化面がすぐれていると以前から思っている。土曜に掲載に移った書評もいつもチェックしている。経営者たちの「私の読書履歴」もざっと見る。7/7もそうだったが、うん？ 「その他の愛読書など」の一冊に目がとまった。

『人間のしるし』（C・モルガン著 石川湧訳 岩波書店）。著者の名前も、訳者も、本の外観までもちゃんと記録しているのが、われながらちょっと驚いた。塾の若先生にもらった本、もうはるか昔のこと。

まだ二十代半ばの若先生が、十代半ばの後輩に、この本をプレゼントする意図はどういうものだったか、読み進めるほどに、わかるようなわからないような、当時はそういう感じだった。

いま思えば、何かしらの期待や〈きょうだい愛〉のようなものだったろう。子どもから大人へと成長し、さまざまな出来事が将来に待ちうけている。でもどんな場合も一人の人間として、自分をしっかり生きる、そういう人間になってほしい。そういう想いがあったのかもしれない。

この本のこともすっかり忘れていたけど、他の先生からも色々な本をもらった。あらためて、今につながる原点は十代にあったと思う。当時まわりにいてくれた大人たちのほとんどは、もうあの世の人になり、一線を退いた人となっている。

つつい忘れがちだけど、誰も一人で生きてきていない。わたしを想いやり、叱咤激励する上の世代があって、今のわたしがある。過日知人が同じようなことを語っていた。人間のよき系譜、そういったものをつないでいく。その役目を負う世代には十分になっているから。

2018年7月16日（月） 晴天、高温

梅雨明けした9日以来ずっと晴れ。さらにこの連休は異常な高温。何もせずじっとしていても、体にわるい。豪雨の被災地が実家という知人が今ごろ現地にかけているはず。気の張りが解けた頃が気がかり。

- 本を読むこと ⑥ - 本を読む時期, 読まない時期

本当に本が好きな人は、生きていううちにあとどのぐらい読めるだろうかと考えるらしい。わたしにはそういうことはないなあと感じながら聞いたものだった。

本を読むことは、わたしにとっては、自問自答の道先案内、対話相手、後押しを求めていることが多い。だから、本を読んでいるということは、自他ともにいろいろと物事を考えているというパラメーター。

そういった意味で、全然本を読んでなかった時期があった。それは20代半ばから30代初め。華やかではあったけど、今の目でみれば、なんともつまらない、人生に魔が差していたような時期。

世間一般的にも女性が一番チャホヤされる頃。当時はそれなりに考えていたと思うけど、ただ若いだけ取り柄の、それなのに自己評価は高い、未熟なことを自分でわかっていない時であった。

この時をはさんで、10代から20代初めが読書歴の前期、独立して脳科学に出会ってからが中期、そして前期・中期それらの核心にあるようなものにふれようとする後期に今入っているように思う。

読書歴の前期は身近な大人たちに拓いてもらった。『愛は脳を活性化する』（松本元）に魅せられたと、仕事で知り合った研究者に話したのをきっかけに、人との出会いによって、中期を拓いてもらった。

自他ともに日常に何か問うものがあるから、本を読むことになった。どんな本を読むかは、問う姿に目の利く人たちが教えてくれた。自問自答を重ねなくなったら、自分の何か大事なものを失くしたことだろうと思う。

2018年7月
21日（土）

a la main

2週おくれの「七タジャズコンサート」。アートなレンタルスペース「ア・ラ・マン」で昨年のクリスマスコンサートに続き、アットホームで贅沢なひととき。いつもながら、キュートなお料理とバラエティーに富んだ飲み物と、そして自由なフランクな会話を愉しみ、すてきな暑気払いになったのでした。



2018年7月23日（月） 異常な暑さ続く

梅雨明け直前の雨はいつまで続くのかと不安な気持ちになるほど、強い雨が降り続いた。9日に梅雨明けしてからは一転、異常な暑さが十日異常も続いている。とうとう、過去の最高気温を更新する41.1℃を埼玉熊谷で記録した。とにかく外を歩いているだけで体力を消耗する感じ。まだ7月、もうひと月同じよう暑さが続くのかと思うと、気が遠くなる。

- 本を読むこと ⑦ - 箕面市立萱野南図書館

出版の売上は下降線をたどっているが、図書館の利用者は増えているらしい。特色ある図書館が出てきて、敷居が低くなったのも一因だろうと思う。

図書館は、学生の頃はほとんど利用していなかった。よく利用するようになったのは独立してからだ。中でも箕面市の萱野南図書館には救われたと言っている。

1995年春に事務所を開設してから、自問の日々が続いた。日曜のたびに、家事を済ませた午後に自転車でいき、閉館時間間際まで居た。あらためて考えると、わたしの来るのを見込んで予め必要な本を用意してくれていたような気さえする。

この図書館で、『ニューウェーブマネジメント』（金井壽広 創元社）に出会わなかったとしたら、そうそうに事務所を閉じたかもしれない。

『心とコンピュータ』（企画・監修 広中平祐 ジャストシステム）に目にとまり、「松本元」に感銘し、『愛は脳を活性化する』（岩波書店）をきっかけに脳科学や認知科学の本を読むようになった。

『創造性を拓く』（ピーターエヴァンズ、ジョフ f ディーハン 早川書房）で知ってるつもりのことを科学する意味を感じるようになった。

『The Helping Interview』（アルフレッドベンジャミン 春秋社）に自分の仕事の一環としてやろうとしていることの役割の一つに、最適なネーミングを見つけてもらった気がした。

萱野南図書館はこじんまりとしながらも、ゆったりとした時間をすごせる図書館だった。ある種、運命的な本の出会いをとりもってくれたところであった。今また誰かのそういう場となっていることでしょう。